

イタリア語の自他交替*

谷川みずき

mizuki.tanigawa@hotmail.co.jp

キーワード：言語類型論 イタリア語 自他交替 動詞対 派生の方向 逆使役

要旨

本論文の目的は、Haspelmath (1993) の 31 の動詞対リストをもとに行った聞き取り調査のデータに基づき、イタリア語の自他交替の派生の方向を分析することである。具体的には、Haspelmath (1993) の動詞対リストをもとに収集したイタリア語のデータを提示した上で、交替の方向性について考察を行い、イタリア語が使役型、逆使役型、自他両用型、および補充型のうち逆使役型を最も多く用いる言語であると結論づける。さらに、イタリア語の自他交替型の分布に対する様々な説明の可能性を提示し、分布の説明の難しさについても指摘する。こうして自他交替の類型論に貢献することを目指す。

1. はじめに

自他交替とは、意味的対応がみられる非使役動詞 (noncausal verbs) と使役動詞 (causal verbs) が形態統語論的にも関連づけられ、対をなす現象であり、これまで言語類型論において多くの研究がなされてきた (1)。ここでいう意味的対応というのは、使役の意味要素を含まない非使役動詞とそれを含む使役動詞が核イベント (core-event) と呼ばれる共通の意味を持つことである (Haspelmath et al. 2014)。日本語の例をみてみよう。

- (1) a. ドアが**開く**。(Doa=ga *ak-u*) (非使役動詞)
door=NOM open-PRS
b. ドアを**開ける**。(Doa=o *ak-er-u*) (使役動詞)
door=ACC open-CAUS-PRS

(1) では、まず意味的対応として、使役の意味要素を含まない非使役動詞「開く」(*ak-u*) と使役の意味要素 (この場合「ドアが開くことを引き起こす」) を含む使役動詞「開ける」(*ak-er-u*) が「開く」という核イベントを共有している。さらに、その意味的対応は、形態論的にも関連づけられており、非使役動詞が無標 (*ak-u*) で表され、一方使役動詞が有標 (*ak-er-u*) で表され

* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー: 窪菌晴夫)・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」(プロジェクトリーダー: ブラシャント・バルデシ) による成果の一部である。執筆にあたって、長屋尚典先生に丁寧な指導をしていただいた。また、島健太、鈴木唯、諸隈夕子 (敬称略) からも貴重なコメントを頂いた。調査に協力してくださったインフォーマントの方々にも心から感謝の意を述べる。なお、言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。

れら動詞対の派生の方向について分析を行う。第4節では、第3節でみたイタリア語の自他交替リストを分析し、それぞれの交替型が用いられた数とその分布についてまとめ、さらに他の言語との比較結果について報告する。第5節では、リスト上にみられる交替型の分布がイタリア語では複雑であるという点について報告し、最後に第6節で全体をまとめる。

2. イタリア語の言語概要

イタリア語は、インドヨーロッパ語族イタリック語派ロマンス諸語に属する言語で、話者人口は、およそ6千万人である。イタリアでは、各地で俗語と呼ばれる様々な方言が話されていたが、1861年の統一を機に、トスカーナ方言をもとに標準イタリア語が作られ、国語教育を通じて広められた。現在では、多くのイタリア語話者が標準イタリア語を理解するが、それぞれ土地の方言を日常的に話す(長神 1988: 501–502)。本文では、慣習に従い標準イタリア語のことを「イタリア語」と呼ぶ。

イタリア語の基本語順は SVO である。名詞は、文法性(男・女)と単数/複数の区別があるが、格は失っている。動詞は、自動詞と他動詞に分けられ、他動詞のうち再帰代名詞を伴うものが再帰動詞(あるいは代名動詞)と呼ばれる。動詞は、主語の人称と数および法と時制によって活用する。法に関しては、不定法、直説法、条件法、接続法および命令法の5つある。時制は、現在、近過去、半過去、大過去、遠過去、先立過去、単純未来および先立未来の8種類がある。そのうち、現在、半過去、遠過去および単純未来は1語で表されるが、近過去、先立未来、先立過去および大過去は複合時制と呼ばれ、助動詞(*essere* ‘be’あるいは*avere* ‘have’)と動詞の過去分詞により表される。活用の型は、不定詞語尾が *-are*, *-ire*, *-ere* のいずれであるかによって異なる(不規則活用も存在する)。表1に、直説法現在の動詞活用のパラダイムを示す。

表 1. イタリア語の直説法現在の動詞活用パラダイム

数	人称	<i>-are</i> 動詞	<i>-ere</i> 動詞	<i>-ire</i> 動詞
単数	1 人称	<i>-o</i>	<i>-o</i>	<i>-o/-isco</i>
	2 人称	<i>-i</i>	<i>-i</i>	<i>-i/-isci</i>
	3 人称	<i>-a</i>	<i>-e</i>	<i>-e/-isce</i>
複数	1 人称	<i>-iamo</i>	<i>-iamo</i>	<i>-iamo</i>
	2 人称	<i>-ate</i>	<i>-ete</i>	<i>-ite</i>
	3 人称	<i>-ano</i>	<i>-ono</i>	<i>-ono/-iscono</i>

3. イタリア語の31の動詞対リストと自他交替の派生関係

本節では、Haspelmath(1993)の動詞リストをもとに聞き取り調査により収集したイタリア語のデータを提示し、イタリア語における自他交替の派生の方向性について分析を行う。まず、第3.1節では、本論文が分類の基準とする自他交替の形態論的派生関係の5分類を導入する。次に、第3.2節では、Haspelmath(1993)の31動詞対リストのイタリア語のデータを提示する。

第 3.3 節では、イタリア語の自他交替のパターンを分類し、実際に聞き取り調査で収集した例文を示しながら、それぞれの交替型について分析する。

これまで先行研究では、自他交替に関する様々な用語が用いられてきたが、本論文では、Haspelmath et al. (2014) に従い、自他交替の意味的対比と形態論的派生関係の対比を明確に区別する目的で、非使役動詞 (noncausal verbs) と使役動詞 (causal verbs) という用語の使用を自他ペアの意味的対比に限る。また、形態論的派生関係の対比に関して、非使役動詞が有標で使役動詞が無標で表されることを逆使役型 (anticausative coding) と呼び、一方非使役動詞が無標で使役動詞が有標で表されることを使役型 (causative coding) と呼ぶこととする。形態論的派生関係に関しては次節で詳しく述べる。

3.1. Haspelmath (1993) の 5 分類

Haspelmath (1993) は、非使役動詞と使役動詞の形態論的派生関係を使役型 (causative)、逆使役型 (anticausative)、両極型 (equipollent)、自他両用型 (labile) および補充型 (suppletive) の5つに分類した。それらの5分類を以下の表2にまとめた。ここでは Haspelmath (1993) の日本語の例を引用する。

表 2. Haspelmath (1993) による交替型の 5 分類

	交替型	特徴	日本語の例
指向型	逆使役型	非使役動詞が有標	<i>sak-e-ru/sak-u</i>
	使役型	使役動詞が有標	<i>wak-u/wak-as-u</i>
無指向型	両極型	非使役動詞と使役動詞が対等な有標性	<i>nao-r-u/nao-s-u</i>
	自他両用型	非使役動詞と使役動詞が同形	<i>hira-ku</i>
	補充型	非使役動詞と使役動詞の語根が異なる	<i>sin-u/koros-u</i>

逆使役型は、*sak-e-ru/sak-u* のように、非使役動詞を有標で表し、使役動詞を無標で表す。反対に使役型は、*wak-u/wak-as-u* のように、非使役動詞を無標で表し、使役動詞を有標で表す。両極型では、*nao-r-u/nao-s-u* のように、非使役動詞と使役動詞が有標性において対等に表される。自他両用型においては、*hira-ku* のように、非使役動詞と使役動詞が同形で表される。補充型では、*sin-u/koros-u* のように、非使役動詞と使役動詞が異なる語根を持つ。

派生の方向を持つ逆使役型と使役型に対し、両極型、自他両用型および補充型は、派生の方向を持たないという点で共通している。そのため、後者3つの交替型を無指向型としてまとめることもある。

3.2. Haspelmath (1993) の 31 の動詞リスト

ここでは、Haspelmath (1993) の 31 の動詞対リストをもとに聞き取り調査³により収集したイ

³ 聞き取り調査には、イタリア共和国南部カラブリア出身の 27 歳男性とポテンツァ出身の 25 歳女性の 2 人に

タリア語のデータを提示する。Haspelmath (1993) は、自他交替の通言語的研究を行うために、31 の動詞対リストを提案した。そのリストでは、自発的に起こりやすい事象を表し通言語的に使役型として表されやすい動詞から、自発的に起こりづらい事象を表し通言語的に逆使役型として表されやすい動詞まで 31 の動詞が上から順番に並べられている。表 3⁴では、筆者が聞き取り調査により収集したデータをもとに、Haspelmath (1993) の 31 の動詞に対応するイタリア語の非使役動詞と使役動詞が不定形で示されている⁵。表の一番右の列では、第 3.1 節で示した Haspelmath (1993) の分類に基づいた自他交替の派生関係を示している。ここで用いる略号は、A が逆使役型、C が使役型、L が自他両用型、S が補充型である。派生関係の分析の根拠については、第 3.3 節で実際に聞き取り調査により収集した例文を示しながら述べる。

表 3. イタリア語の 31 の自他交替リスト

No.	核イベント	非使役動詞	使役動詞	交替型
1	boil	<i>bollire</i>	<i>bollire</i>	L
2	freeze	<i>congelare</i>	<i>congelare</i>	L
		<i>congelarsi</i>	<i>congelare</i>	A
3	dry	<i>asciugar=si</i>	<i>asciugare</i>	A
4	wake up	<i>svegliar=si</i>	<i>svegliare</i>	A
5	go out/put out	<i>spegner=si</i>	<i>spegnere</i>	A
		<i>estinguer=si</i>	<i>estinguer</i>	A
6	sink	<i>affondare</i>	<i>affondare</i>	L
7	learn/teach	<i>imparare</i>	<i>insegnare</i>	S
8	melt	<i>scioglier=si</i>	<i>sciogliere</i>	A
		<i>scongolar=si</i>	<i>scongolare</i>	A
9	stop	<i>fermar=si</i>	<i>fermare</i>	A
10	turn	<i>girar=si</i>	<i>girare</i>	A
11	dissolve	<i>dissolver=si</i>	<i>dissolvere</i>	A
		<i>squagliar=si</i>	<i>squagliare</i>	A
12	burn	<i>bruciare</i>	<i>bruciare</i>	L
13	destroy	<i>venire distrutto</i>	<i>distruggere</i>	A
14	fill	<i>riempir=si</i>	<i>riempire</i>	A
15	finish	<i>finire</i>	<i>finire</i>	L
16	begin	<i>cominciare</i>	<i>cominciare</i>	L

協力していただいた。調査は、2020年2月5日と2020年3月9日の2回にわたって、1人ずつ東京で行った。

⁴ この表は、以下の WATP (The World Atlas of Transitivity Pairs) に提供したデータと同様のものである。Tanigawa, Mizuki. 2020. Transitivity pairs in Italian. The World Atlas of Transitivity Pairs. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics. Available online at: <http://watp.ninjal.ac.jp>.

⁵ Haspelmath (1993) においても、動詞対が不定形でリストに示されているため、今回もそれに従うこととする。

17	spread	<i>propagar=si</i>	<i>propagare</i>	A
18	roll	<i>rotolare</i>	<i>fare rotolare</i>	C
19	develop	<i>sviluppar=si</i>	<i>sviluppare</i>	A
20	get lost/lose	<i>perder=si</i>	<i>perdere</i>	A
21	rise/raise	<i>alzar=si</i>	<i>alzare</i>	A
22	improve	<i>migliorare</i>	<i>migliorare</i>	L
23	rock	<i>dondolare</i>	<i>dondolare</i>	L
24	connect	<i>connetter=si</i>	<i>connettere</i>	A
25	change	<i>cambiare</i>	<i>cambiare</i>	L
26	gather	<i>radunar=si</i>	<i>radunare</i>	A
27	open	<i>aprir=si</i>	<i>aprire</i>	A
28	break	<i>romper=si</i>	<i>rompere</i>	A
29	close	<i>chiuder=si</i>	<i>chiudere</i>	A
30	split	<i>divider=si</i>	<i>dividere</i>	A
31	die/kill	<i>morire</i>	<i>uccidere</i>	S

3.3. イタリア語における自他交替

ここでは、上記の表3で示した自他交替の派生関係の分類をどのような基準で行ったかを示すために、イタリア語にみられる逆使役型(第3.3.1節)、使役型(第3.3.2節)、自他両用型(第3.3.3節)および補充型(第3.3.4節)の4つの交替型について記述する。本節で用いる例文は、全て実際に聞き取り調査で筆者が作成した英語の文をインフォーマントにイタリア語に訳してもらうことにより収集したデータである。表3で用いられた番号を引用する場合は、角括弧[]で示す。

3.3.1. 逆使役型

イタリア語には、逆使役型の表現パターンとして、補語人称代名詞非強勢形を伴う表現と受動態の2つの分析的な表現がある。まず、非使役動詞が主語と同一の補語人称代名詞非強勢形(*mi・ti・si・ci・vi・si*)を伴い⁶、使役動詞は無標で表されるパターンがある。この自他交替パターンは、表3において [3] *asciugar=si/asciugare* ‘dry’ や [4] *svegliar=si/svegliare* ‘wake up’ 他 31例中 18の動詞で観察された。(4)に [27] *aprir=si/aprire* ‘open’ の例を示す⁷。

(4) a. *La porta si apre.*

⁶ 補語人称代名詞非強制形は、不定詞においては動詞に後続し、その際、動詞語尾の母音は消失する(イタリア語文法では *troncamento* と呼ばれる)。それ以外の場合は、*si* は、動詞の前に置かれ、動詞と分けて表記されるが、アクセントは置かれず、動詞とひと続きで発音される。このため、イタリア語研究においては、*si* は接語であるとされている。

⁷ *Si* は、接語であるが、例文では正書法に合わせて分かち書きする。

- ART door REFL **open.PRS.3SG**
 ‘The door opens.’
 b. *Apro la porta.*
open.PRS.1SG ART door
 ‘I open the door.’

もう一方の分析的な表現として、「venire ‘come’+ 過去分詞」により作られる受動態がある。以下の (5) にその例を示している。

- (5) a. *La casa viene distrutta.*
 ART house **come.PRS.3SG** **destroy.PST.PTCP**
 ‘The house gets destroyed.’
 b. *Distruggo la casa.*
destroy.PRS.1SG ART house
 ‘I destroy the house.’

(5) では、非使役動詞が *viene distrutta* と「venire ‘come’+ 過去分詞」の受動態で表されており、一方、使役動詞が無標で表されている。表 3 では、ここで示した自動詞を持たない動詞対である [13] *venire distrutto/distruggere* ‘destroy (intr./tr.)’ のみが受動態により表現された。

3.3.2. 使役型

イタリア語には、(1) の日本語の例とは異なり、形態論的な使役型は存在しないが、分析的な使役表現として、*fare* ‘do’ + 動詞の不定詞がある。表 3 の動詞対のうち、他動詞用法がない [18] *rotolare/fare rotolare* ‘roll’ の動詞対のみにおいて (6) のようにこの使役表現が用いられた。

- (6) a. *La palla rotola.*
 ART ball **roll.PRS.3SG**
 ‘The ball rolls.’
 b. *Io faccio rotolare la palla.*
 I **do.PRS.1SG** **roll.PRS** ART ball
 ‘I roll the ball.’

3.3.3. 自他両用型

自他両用型では、非使役動詞と使役動詞が同じ語幹⁸で表される。表3では、[1] boil, [2] freeze, [6] sink, [12] burn, [15] finish, [16] begin, [22] improve, [23] rock, [25] change の動詞対が自他両用型により表された。以下 (7) から (9) では、[1] *bollire* ‘boil (intr./tr.)’ と [15] *finire* ‘finish (intr./tr.)’ と [16] *cominciare, iniziare* ‘begin (intr./tr.)’ の例を示している。

- (7) a. *L'acqua bolle.*
 ART.water **boil.PRS.3SG**
 ‘The water boils.’
- b. *Lui bolle l'acqua.*
 he **boil.PRS.3SG** ART.water
 ‘He boils the water.’
- (8) a. *La scuola finisce.*
 ART school **finish.PRS.3SG**
 ‘The school finishes.’
- b. *Lui finisce la scuola.*
 he **finish.PRS.3SG** ART school
 ‘He finishes the school.’
- (9) a. *La lezione comincia/inizia.*
 ART class **begin.PRS.3SG**
 ‘The class begins.’
- b. *Il professore comincia/inizia la lezione.*
 ART professor **begin.PRS.3SG** ART class
 ‘The professor begins the class.’

以上の例文 (7) から (9) では、a. の非使役動詞と b. の使役動詞が同形で表されている。なお、主語の人称・数によっては、動詞の活用が変わるが、それは使役性とは関係ない。

以上でみた自他両用型の動詞は、単純時制 (現在、半過去、遠過去、単純未来) においては自他が区別されないものの、複合時制 (近過去、先立未来、先立過去、大過去) においては、自他両用型を含む全ての動詞の自他が助動詞により区別される⁹。具体的には、複合時制は、助動詞

⁸ ここで、同じ「語幹」と限定する理由は、主語の人称・数によっては、動詞の活用が変わるためである。しかし、その場合の活用の違いは使役性とは関係ない。

⁹ 同じロマンス諸語でもフランス語では、非使役動詞が無標で表される動詞と有標で表される動詞がそれぞれ異なる助動詞をとるが、イタリア語では、有標性にかかわらず非使役動詞において、全ての動詞が同じ助動詞をとる (Schäfer 2008: 20)。例えば、下の逆使役型の例でも (10) の自他両用型と同様に、近過去時制において非使役動詞と使役動詞で異なる助動詞をとる。

- a. *Mi sono svegliato alle 7.*
 REFL.1SG **be.PRS.1SG** wake up.PST.PTCP at 7
 ‘I woke up at 7.’
- b. *Ho svegliato mia madre alle 7.*

+ 動詞の過去分詞により表され、非使役動詞では、*essere* ‘be’ が助動詞として用いられ、一方使役動詞では、*avere* ‘have’ が助動詞として用いられる。以下、(10) に近過去の例を示す。なお、近過去とは、過去時制の中で最もよく用いられ、現在と何らかの関係のある過去を示す時制である (坂本 1979)。

- (10) a. *L’acqua è bollita.*
 ART.water be.PRS.3SG boil.PST.PTCP
 ‘The water is boiled.’
- b. *Ho bollito l’acqua.*
 have.PRS.1SG boil.PST.PTCP ART.water
 ‘I have boiled the water.’

非使役動詞である (10a) の近過去時制は、助動詞 *essere* ‘be’ + 動詞の過去分詞により表されている ((10a) の *è* は、*essere* ‘be’ の 3 人称単数形である)。一方使役動詞である (10b) の過去時制は、*avere* ‘have’ + 動詞の過去分詞により表されている ((10b) の *ho* は、*avere* ‘have’ の 1 人称単数形である)。

以上でみたように、複合時制での自他の区別はあるものの、本論文では、非使役動詞と使役動詞が現在形において同形である限り、その動詞対を自他両用型として分析する。というのも、現在、単純未来および他の過去時制で自他が同形で表される動詞対を自他両用型ではない交替型として分析するのは不自然だと考えるからである¹⁰。

3.3.4 補充型

補充型では、非使役動詞と使役動詞が異なる語根を持つ。表 3 では、[7] *imparare/insegnare* ‘learn/teach’ と [31] *morire/uccidere* ‘die, kill’ の 2 つの動詞対において補充法が観察された。それぞれの例を以下の (11) と (12) で示す。

- (11) a. *Imparo l’italiano.*
 learn.PRS.1SG ART.Italian
 ‘I learn Italian.’
- b. *Insegno l’italiano.*
 teach.PRS.1SG ART.Italian
 ‘I teach Italian.’

have.PRS.1SG wake up.PST.PTCPmy mother at 7
 ‘I woke up my mother at 7.’

¹⁰ Haspelmath (1993) のフランス語の分析においても、自他が助動詞により区別される動詞対であっても、現在形の形によって派生の方向の分析が行われている。

- (12) a. *I miei amici muoiono.*
 ART my friends die.PRS.3PL
 ‘My friends die.’
- b. *Uccido i miei amici.*
 kill.PRS.1SG ART my friends
 ‘I kill my friends.’

4. 分析

本節では、表3でみたイタリア語の自他交替リストを分析し、それぞれの交替型が用いられた数とその分布についてまとめ、さらに他の言語との比較結果について報告する。まず、表4は、表3の31の動詞対リストに基づき、イタリア語におけるそれぞれの交替型の動詞対の数(全31)を示している。動詞の数は、Haspelmath(1993)に従って、1つの英語の動詞に対応するイタリア語の動詞が2つある場合は、それぞれを0.5としてカウントした。例えば、[8] melt は、対応するイタリア語が *sciogliere=si* と *scongolar=si* の2つあるため、それぞれを0.5としてカウントした。

表4. イタリア語におけるそれぞれの交替型の動詞数と全体に占める割合

交替型	A	C	E	L	S
動詞の数	19.5	1	0	8.5	2

表4が示すように、イタリア語では、最も支配的に用いられている自他交替のパターンは、逆使役型であり、19.5の動詞対において用いられた。次に多いのが自他両用型であり、8.5の動詞対において用いられたことがわかる。補充型と使役型は、滅多に用いられなかった。

次に、それぞれの交替パターンについて詳しく分析する。逆使役型は、1つの動詞対を除いて全て *si* を用いた逆使役である。[13] destroy においてのみ、第3.3.2節で示したように、非使役動詞が分析的な受動態により表された。しかし、これは通言語的に珍しいことではなく、(Schäfer 2009: 655) は、‘destroy’に相当する動詞が自動詞用法を持たない言語が英語やドイツ語のように複数あることを報告している。一方、使役型は、他動詞用法がない [18] roll の1例においてのみ用いられた。自他両用型は、[1] boil, [2] freeze, [6] sink, [12] burn, [15] finish, [16] begin, [22] improve, [23] rock, [25] change において用いられた。補充型は、[7] learn/teach と [31] die/kill において用いられた。このうち kill は、通言語的に補充型によって表されることが多い (Haspelmath 1993: 106)。

さらに、表4でみた各交替型をとるイタリア語の動詞数を他言語と比較する。表5は、Haspelmath (1993) で調査された21の言語のうち、使役型に対する逆使役型の比率 (A/C) が高い上位7言語とイタリア語の結果を示している。表の一番右には、使役型に対する逆使役型の割合が示されている。(残り14言語のデータはここでは割愛するが、それらの言語の逆使役型

の数、イタリア語のそれよりも少ない。)

表 5. 各交替型の動詞数 (他言語との比較)

交替型	A	C	E	L	S	A/C
ロシア語	23	0	5	0	3	46.00 ¹¹
ドイツ語	14.5	0	4	11.5	1	29.00
ギリシャ語	13.5	0	0	16.5	1	27.00
ルーマニア語	24	1	0	3	2	24.00
イタリア語	19.5	1	0	8.5	2	19.50
フランス語	20.50	2	0	7.5	1	10.25
リトアニア語	17.5	6	6	0.5	1	2.92
ヘブライ語	20.5	7.5	2	1	0	2.73

表 5 から、Haspelmath (1993) の 21 言語と比べると、イタリア語における逆使役型の動詞数は、ルーマニア語、ロシア語、フランス語、ヘブライ語に次いで 5 番目に多いということがわかる。このことから、イタリア語は、地域的特徴として逆使役型が多いとされてきたヨーロッパの諸言語 (Haspelmath 1993: 102–103; Nichols, Peterson & Barnes 2004; Comrie 2006) の中でも、逆使役型を好む傾向が比較的強いと結論づけることができる。

5 分布に対する様々な説明の可能性

最後に本節では、イタリア語の自他交替のパターン分布に対する様々な説明の可能性を提示し、分布の説明が一筋縄にはいかないことを報告する。まず、Haspelmath (1993) は、表 3 の上の方の動詞がより自発性が高く、通言語的に使役型になりやすく、一方、下の方がより自発性が低く、通言語的に逆使役型になりやすいと説明している。イタリア語の自他交替パターンの分布においては、逆使役型が表の上下両方で多く現れる。

また、Centineo (1995) は、イタリア語の自他交替パターンの分布を論理構造 (logical structure) の違いと派生の方向の違いにより説明している。例えば、*aprire* ‘open’ は、使役事象を表す他動詞ベースの動詞であるが、一方 *affondare* ‘sink’ は、状態変化を表す自動詞ベースの動詞である。Centineo は、inchoative の事象を表す場合には、前者は、*si* を伴うことで派生 (inchoativization) するが、後者は *si* を伴わず使役要素を追加することにより派生されると主張している。

一方、Folli (2002) は、イタリア語の自他交替のパターンには、非使役動詞の表し方に 3 通りがあり、*si* を必ず伴う動詞 (*rompere* ‘break’, *svegliare* ‘wake up’, *aprire* ‘open’ 等)、*si* を伴わない動詞 (*cambiare* ‘change’, *migliorare* ‘improve’, *affondare* ‘sink’ 等)、*si* を伴う場合と伴わない場合がある動詞 (*asciugare* ‘dry’, *bruciare* ‘burn’, *congelare* ‘freeze’ 等) があると分析している。Folli は、さ

¹¹ Haspelmath (1993) は、使役型の動詞数が 0 の場合、逆使役の動詞数を 2 倍することで使役型に対する逆使役型の比率 (A/C) を算出している。

らに、*si*を必ず伴う動詞は、共通してtelicな特性を有し、*si*を伴わない(つまり自他両用型)動詞は、共通してatelicな特性を有し、*si*を伴う場合と伴わない場合がある動詞は、telicの場合に*si*を伴い、atelicの場合に伴わないと主張する。しかし、Schäfer (2008) が指摘するように、この説明では、例外が多くでてしまう。例えば、*affondare* ‘sink’ は、telicの性質を持っているにもかかわらず*si*を伴わない。

上記以外の説明として、*si*を伴う場合と伴わない場合がある動詞が*si*を実際に伴うか否かは、自発性と関係している可能性もある。具体的には、以下の(13)から(17)に示すように、自発的に起こると判断する事象には*si*を伴い、自発的には起こりづらい事象には*si*を伴わない。

- (13) ??*Il fuoco si brucia.*
 ART fire REFL burn.PRS.3SG
 ‘The fire burns by itself.’
- (14) *Il fuoco brucia.*
 ART fire burn.PRS.3SG
 ‘The fire burns.’
- (15) ??*L’acqua si congela.*
 ART.water REFL freeze.PRS.3SG
 ‘The water freezes by itself.’
- (16) *L’acqua congela.*
 ART.water freeze.PRS.3SG
 ‘The water freezes.’
- (17) *L’acqua si congela in Norvegia.*
 ART.water REFL freeze.PRS.3SG in Norway
 ‘The water freezes by itself in Norway.’

(13)と(14)の*bruciare* ‘burn’に関しては、(13)のように*si*を用いると、まるで火が自発的に燃え始めるように聞こえ、そのような事象は考え難いため不自然であるとイタリア語話者は判断する。一方(14)のように*si*を伴わない文は自然だと判断する。同様に、(15)から(17)の*congelare* ‘freeze’に関しても、水が自発的に凍る事象はイタリアでは寒い地域以外では考え難いため、*si*を伴う(15)は不自然であり、代わりに*si*を伴わない(16)が自然であるとイタリア語話者は判断する¹²。ただ、ノルウェーのような寒い北国では、水が自発的に凍るという事象も考えられるため、その場合*si*を伴う(17)は自然だと解釈されるという。

以上のように、イタリア語の自他交替の分布は複雑であり、それに対する説明としては様々

¹² この判断は、調査に協力していただいたイタリア語話者が温暖な南イタリア出身であることに影響を受けている可能性もある。

な可能性がある。本論文では、それぞれの説明に対する評価はしないが、この点に関しては、今後詳細な研究を要する。

6. まとめ

本論文は、Haspelmath (1993) の 31 の動詞リストをもとに行った聞き取り調査の結果に基づき、イタリア語の自他交替の派生方向のデータを提供した。イタリア語には、大きく分けて 4 パターンの交替型 (形態論的な逆使役型・自他両用型・補充型・分析的な使役型) があり、それら 4 つの交替型のうち、逆使役型が最も多く用いられ、その次に自他両用型が多く用いられる。イタリア語の自他交替の分布は複雑であり、それに対する説明としては様々な可能性がある。

参考文献

- Centineo, Giulia (1995) The distribution of *si* in Italian transitive/inchoative pairs. In Mandy Simons & Teresa Galloway (eds.), *Semantics and Linguistic Theory*, vol. 5, 54–71. Ithaca, N.Y.: Cornell University.
- Comrie, Bernard (2006) Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics* 44(2). 303–318.
- Folli, Raffaella (2002) Constructing telicity in English and Italian. Oxford: University of Oxford Ph.D. dissertation.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*, 87–120. Amsterdam: John Benjamin.
- Haspelmath, Martin, Andreea Calude, Michael Spagnol, Heiko Narrog & Elif Bamyacı (2014) Coding causal–noncausal verb alternations: A form–frequency correspondence explanation. *Journal of Linguistics* 50(3). 587–625.
- Nichols, Johanna, David A. Peterson & Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8(2). 149–211.
- Schäfer, Florian (2008) *The Syntax of (Anti-)causatives: External Arguments in Change-of-state Contexts*. Amsterdam: John Benjamins.
- Schäfer, Florian (2009) The causative alternation. *Language and Linguistics Compass* 3(2). 641–681.
- Tanigawa, Mizuki (2020) Causal–noncausal verb alternations in Norwegian. *Tokyo University Linguistic Papers* 42. e150–e168.
- 坂本鉄男 (1979) 『現代イタリア文法』. 東京: 白水社.
- 長神悟 (1988) 「イタリア語」. 亀井孝, 河野六郎 & 千野栄一 (編), 『言語学大辞典』, vol. 1, 591–605. 東京: 三省堂.
- 諸隈夕子 (2020) 「ケチュア語アヤクーチョ方言の自他交替—心理動詞の両極性に着目して—」. 『東京大学言語論集』 42. e16–e40.

Causal–Noncausal Verb Alternations in Italian

Mizuki Tanigawa

mizuki.tanigawa@hotmail.co.jp

Keywords: linguistic typology, Italian, causal–noncausal alternation, verb pairs, direction of derivation, anticausative

Abstract

This paper examines the typological characteristics of causal–noncausal verb alternations in Italian. To be more specific, the direction of formal basic-derived relationships in 31 causal–noncausal verb pairs in Italian is analyzed based on the list proposed by Haspelmath (1993). This paper reveals that Italian shows a preference for anticausative coding. Moreover, it also points out that it is difficult to predict the preferences of individual verbs for different coding types in Italian.

(たにがわ・みずき 東京大学言語学研究室)